

(資料)

潜在看護師による模擬患者を活用した課外演習での経験が看護学生の看護実践能力に及ぼす変化

早出春美¹⁾ 新藤裕治¹⁾ 山本奈央¹⁾ 芳賀了¹⁾ 本間隆之¹⁾

要 旨

目的：潜在看護師による模擬患者（SP）を活用した課外演習での経験が看護学生の看護実践能力に及ぼす変化を明らかにし、その経験から潜在看護師 SP の特性を客観的に見出す。

方法：看護大学生 4 名を対象に、潜在看護師 SP による課外演習を実施し、看護実践能力に及ぼす変化を、Kiss-18、ラサター臨床判断ルーブリック、自ら学ぶ意欲測定尺度にて評価し、課外演習での経験や SP の認識について、グループインタビューを実施した。

結果：学生は【臨場感のある複数患者を受け持つ経験】【学生同士では味わえない経験を通してより良い援助を探究する意義を自覚する経験】をし、学内でも臨地実習に近い臨床状況を再現でき学習効果の向上が再確認できた。また、〈実際の患者を逸脱した演技による非現実的な経験〉から、患者の反応や看護援助を理解できる潜在看護師だからこそ、本来の患者を逸脱した反応を無意識に演じてしまうという特性が見出された。

キーワード： 潜在看護師 模擬患者 看護学生 看護実践能力

I. 研究背景

少子高齢化に伴う地域完結型医療や地域包括ケアシステム構築の推進、人口および疾病構造の変化に応じた医療提供体制の整備が急速に進む現在の日本において、対象者のケアを中心的に担う看護職者の活動の場や役割も拡大している。看護職者には、このような多様な場や対象者の多様性や複雑性に対応した看護を創造する能力や高度な実践力が求められており、看護基礎教育の担う役割も大きい。

しかし、看護基礎教育をめぐる現状と課題として、人間関係の希薄化、生活体験やコミュニケーション能力の不足などが指摘されている¹⁾。加えて、現代の学生は、少子化、核家族化などにより、年代の異なる他者と接する機会が少なく、学生同士の演習だけでは患者の状況をイメージすることが困難であり²⁾、学生自身の生活体験を生かしつつ、看護職者としての専門的認識を現実感のあるものとして形成し得る教育方法の工夫が課題とされている³⁾。

学生の看護実践能力の涵養には、患者への直接的経験が重要であるが、患者の権利意識の高揚に伴い、資格のない学生が臨床で患者への直接的ケアを実施

することは難しくなっている²⁾。さらに、2020年のCOVID-19感染症の世界規模での流行により、臨地実習が困難な状況となり、多くの大学が臨地実習を学内実習・学内演習（90.7%）やオンライン（88.6%）での代替実施を余儀なくされた⁴⁾。

看護の臨地実習では、看護職者が行う実践の中に学生が身を置き、看護職者の立場でケアを行うことで、学生は学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りつつ、実践へ適用する能力を習得する。また、看護実践に不可欠な援助の人間関係形成能力や専門職者として役割や責務を果たす能力は、看護を受ける対象者と相対し、緊張しながら学生自ら看護行為を行うという過程で育まれる⁵⁾。実際に患者からのフィードバックを得ながら実践を行う機会は、臨地実習固有のものであるが、臨地以外の場で行うシミュレーション教育を組み合わせることで、学生の知識と技術を統合するという点で一定程度到達が可能であることが示されている。限られた臨地実習で最大限の学修効果を得るためには、臨地実習前の準備段階の学修が重要であり、看護専門職者に求められる看護実践能力が、どのような環境下にあっても適切

受付日：2023年6月9日 受理日：2023年8月8日

1) 山梨県立大学看護学部

に修得できるよう、看護系大学は新たな教育方法を開発、教育効果を検証し、教育の質向上に取り組む必要がある⁴⁾。

厚生労働省⁶⁾は、看護師に求められる実践能力を育成するための教育方法として、モデル人形を用いたシミュレーションやコミュニケーション能力を補完する模擬患者（以下、SP）の活用などを推進している。SPとは「ある疾患の患者の持つあらゆる特徴、単に病歴や身体所見にとどまらず、病人特有の態度や心理的・感情的側面に至るまでを、可能な限り模倣するよう訓練を受けた健康人」と定義されている⁷⁾。SPを活用した教育は、患者に関わる以前の、段階的・実践的学習を促進するうえで貴重な機会になる²⁾ばかりでなく、認知（知識や理解力）、情意（態度やコミュニケーション能力）、精神運動領域（技能）の統合を可能にする方法論としても有用である⁸⁾。

SPを活用した教育の効果として、自分の傾向や課題に気づく、患者の視点に気づく⁹⁾、臨地でのリアリティに近い、患者をイメージしやすい、学習の内発的動機付け、コミュニケーション能力の形成、看護師としての態度の形成¹⁰⁾、フィードバックからの学び、振り返る機会¹¹⁾などが報告されている。

また、SPを活用した教育の課題には、SPとしての知識・技術の格差、SPの高齢化、SPのモチベーションの持続¹⁰⁾や質の高いSPの育成、SPで表現できることの限界、教員の能力差¹²⁾などがある。SPとしての知識・技術の格差はSPの質の確保に影響し、SPの質により学生の学びが左右されることから重要な課題であることが指摘されている¹⁰⁾。SPの主たる役割には「演技」「フィードバック」「評価」の3つがあり¹³⁾、これらの質を総合的に高めることが学生の学びの質の向上につながると考えられる。特に、看護ケアは、「対象への直接的な援助行為」と定義されており¹⁴⁾、看護教育におけるSPには、学生の言葉や表情だけでなく、身のこなし方や触れ方など身体を通して伝わる感覚から反応できる、適切なフィードバックができる高度なスキルが求められる¹⁵⁾。加えて、援助方法によっては呼吸困難が増強するなど症状が変化するため、その状況を判断し演じる必要があり、実際の臨床患者を見たことのない一般市民にはイメージすることが難しいと推察される。大学ら¹⁶⁾は、一般市民ボランティア団体が養成したSPは、医学教育のSPとして病態や症状を認識レベルで標準化しているが、看護教育の身体援助に関わるSPとしては不十分であること、現任看護師SPは、標準化

を達成したかわりに本当の「患者」としてのリアリティが損なわれたことから、SPに何を求めるかを明確にし、SPを選択する必要性を示唆している。また、医療職者がSPをするうえ陥りやすい問題点として「専門用語や不適切な説明が理解できることによる不適切な演技」「批判的・評価的・教員的なフィードバック」「患者の気持ちに対する思い込みや決めつけ」が指摘されており¹⁷⁾、患者としてのリアリティ、シナリオの難易度や評価の視点を含め、目的に応じたSP養成のあり方を検討することが急務と言える。これらの課題を解決し看護教育における複雑高度でリアリティのある臨床状況を再現するために、我々は全国に約71万人と推計される¹⁸⁾潜在看護師に活用可能性を見出し、SP養成に取り組んでいる。潜在看護師の活用は、学生の高度な看護実践能力の獲得につながるだけでなく、教育に参画することで潜在看護師の復職支援や働き方改革としても意義あるものと考ええる。

一方、野呂瀬ら¹⁹⁾は、薬学教育においては教育プログラム設計やSPの演技・フィードバックの質向上に関する知見は蓄積されているものの、学習の主体となる学習者自身の背景が学習者の学習過程に及ぼす影響や、学習者の背景に合わせたプログラム、学習環境の構築に関する議論が少ないことを指摘している。看護基礎教育においても、学習の主体となる学生個々の背景にも着目し、SPを活用した演習での経験や看護実践能力とどのような関連があるのか知見を蓄積していくことが、SPを活用した教育プログラム設計や学習環境設定を検討するうえで有用な資料となると考える。

そこで本研究では、潜在看護師をSPとして活用した課外演習での経験が看護学生の看護実践能力に及ぼす変化を明らかにする。さらに、SP参加型学習の主体は学生であり、学習目標を達成するためにも学習教材としての潜在看護師SPの特性を、学生の課外演習での経験やSPの認識から客観的に見出すことで、今後の看護基礎教育におけるSPを活用した効果的な教育方法を検討するうえでの示唆を得る。

II. 研究の目的

本研究の目的は、潜在看護師によるSPを活用した課外演習での経験が看護学生の看護実践能力に及ぼす変化を明らかにし、その経験やSPに対する認識から客観的に潜在看護師SPの特性を見出すことである。

Ⅲ. 研究の意義

潜在看護師をSPとして活用した課外演習での経験が、看護学生の看護実践能力に及ぼす変化を明らかにすることで、看護実践能力向上に有用な教育方法や、SP養成プログラムなどを検討するうえで有用な資料となる。また、潜在看護師SPの特性を見出すことで、看護基礎教育におけるSPの活用可能性を検証するうえでの示唆が得られる。

SPを活用した演習での経験と学生の背景と看護実践能力との関連について検討することで、学習者の背景に合わせたプログラム設計や学習環境の構築につながる。さらに、このような学習機会は、学生の自己課題の明確化や学習意欲の向上に加え、潜在看護師の看護専門職者としての課題の明確化や意欲向上につながるなどの双方に有用な場となることが期待できる。

Ⅳ. 用語の操作的定義

1. 看護実践能力

本研究では、看護実践能力を、看護基礎教育検討会報告書¹⁾の「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン(別表3)」の「教育の基本的考え方」1)人間を身体的・精神的・社会的に統合された存在として幅広く理解する能力、2)対象を中心とした看護を提供するために、看護師としての人間関係を形成するコミュニケーション能力、3)看護師としての責務を自覚し、対象の立場に立った倫理に基づく看護を実践する基礎的能力、4)科学的根拠に基づいた看護の実践に必要な臨床判断を行うための基礎的能力、5)健康の保持・増進、疾病の予防及び健康の回復に関わる看護を、健康の状態やその変化に応じて実践する基礎的能力、7)専門職業人として、最新知識・技術を自ら学び続け、看護の質の向上を図る基礎的能力とする。なお、本学の専門職連携実習が3年後期であるため、多職種連携の要素は除外した。

Ⅴ. 研究方法

1. 研究デザイン

準混合研究デザインとした。

2. 研究対象

A大学看護学部2年生で、課外演習への参加を希望する学生とし、休学中の2年生は除外した。2年生は、COVID-19の影響により、1年次の演習科目がオンラインや3密回避のために演習項目や時間に

制限があったこと、2年次の基礎看護学実習においても、病院の受け入れや実習期間や時間の短縮などの制約があったことから、技術演習へのニーズが高いと推察されることから選定した。

対象者のリクルートは、授業時間外に課外演習について周知すると共に専用アカウントから案内メールの配信および学内掲示板への募集案内の掲示により行った。参加希望者には、課外演習前に研究の趣旨、方法などについて説明し、同意書への署名により同意を得た。

3. 研究期間

2021年10月29日～2023年3月31日。

4. 課外演習の実施方法

2022年9月13日および2023年1月12日にA大学の実習室にて課外演習を実施した。計画当初は9月のみの実施予定であったが、COVID-19の影響により参加できない学生もおり対象者数が少なかったため、追加募集を行い参加者の希望により1月に実施した。

演習課題は、心不全患者のヘルスアセスメントと寝衣交換とし、学生はSPに対し援助(20分)と研究者への報告(5分)を行った。その後、実施した援助に対しSPによるフィードバックと研究者による評価を実施した。対象学生には、事前説明の際に課題と事例を提示し、実施時間などを説明し、課外演習当日までに援助の方法などについて考えてくること、必要に応じて技術練習なども可能であることを説明した。1名の学生が異なるSPに2～3回の援助を実施した。

5. 調査内容と調査方法

1) 量的アプローチ

潜在看護師によるSPを活用した課外演習での経験が看護学生の看護実践能力に及ぼす変化について、以下の評価指標を用いて測定した。なお、(1)(3)は課外演習前後での変化を、(2)は課外演習時における臨床判断能力を評価するため、課外演習後に質問紙への回答を求めた。

(1) 人間関係を形成する能力

人間関係を形成する能力は、社会的スキル測定尺度であるKiss-18²⁰⁾にて測定した。社会的スキルとは「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル(技

能)」と定義されている²⁰⁾。Kiss-18は、高い信頼性・妥当性をもつ尺度であり、18項目、6つの下位尺度「初歩的なスキル」「高度のスキル」「感情処理のスキル」「攻撃に代わるスキル」「ストレスを処理するスキル」「計画のスキル」で構成される。いつもそうだ(5点)、たいていそうだ(4点)、どちらともいえない(3点)、たいていそうでない(2点)、いつもそうでない(1点)の5件法で評定を求め、18項目の合計得点が高いほど社会的スキルが高いことを示す。

(2) 臨床判断の基礎的能力

臨床判断の基礎的能力については、ラサター臨床判断ルーブリック(Lasater Clinical Judgment Rubric; 以下、LCJR)日本語版²¹⁾を用いて評価した。LCJRは、Tanner²²⁾の提唱した臨床判断モデルに基づき、臨床的思考について学生や教員、実習指導者が話し合うための「共通の言葉(common language)」として開発されたものであり、学習者の臨床判断の発達を評価するために活用されている。LCJRは、効果的な気づき3観点、効果的な解釈2観点、効果的な反応4観点、効果的な省察2観点の11観点について4つのレベル「初歩的」「発展途上」「達成」「模範的」で評価する。

対象者には、事前説明会で配布し、ルーブリックの項目を確認してもらい、課外演習でのSPに対する援助実施後に学生の自己評価を求めた。

(3) 専門職業人として自ら学び続ける基礎的能力

専門職業人として自ら学び続ける基礎的能力は、自ら学ぶ意欲測定尺度²³⁾にて測定した。35項目、3レベル7因子から成る尺度で、よくあてはまる(5点)、あてはまる(4点)、どちらともいえない(3点)、あてはまらない(2点)、全くあてはまらない(1点)の5件法で評定を求め、得点が高い方が自ら学ぶ意欲が高いことを示す。

2) 質的アプローチ

潜在看護師によるSPを活用した課外演習による学生の経験については、各課外演習の参加学生毎にグループインタビューを実施した。本研究では、潜在看護師によるSPを活用した課外演習での経験や潜在看護師SPに対する認識について共有することで、最終的に潜在看護師SPの特性を客観的に見出すことをねらいとしているため、創発的なデータを生成することを意図しグループインタビューを採用した。イ

ンタビューガイドに沿って、SPに対し援助を実施した経験やSPに対する認識についてインタビューを実施した。課外演習当日に学生評価に関わらない研究者が1回30～40分程度のインタビューを行い、対象者の了承を得てICレコーダーに録音した。

6. 分析方法

社会的スキル測定尺度、自ら学ぶ意欲測定尺度の得点については、単純集計し、課外演習前後での得点の変化について比較した。また、LCJRについては、11の観点について4つのレベルで評価した結果をまとめた。

グループインタビューについては、内容分析を行った。語られたデータから作成した逐語録を繰り返し読み、語りの中から、潜在看護師SPを活用した課外演習での経験と潜在看護師SPに対する認識に関する内容を抽出し、コード化した。コードの意味内容の類似性などを比較検討し、共通したまとまりを抽象化しサブカテゴリー、カテゴリー化した。信頼性・妥当性を確保しバイアスを最小限にするために複数の研究者間で繰り返し確認した。

VI. 倫理的配慮

本研究は、事前に所属学部の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:2021-17)。対象者は研究者の所属学部の学生であるため、研究参加への強制力を排除し、課外演習での実施内容が成績に影響することがないように実習や定期試験終了後に実施した。また、対象者には課外演習の結果が成績評価や今後の学業への影響がないことを説明した。なお、1月の実施については学生の希望を優先したため定期試験前の実施となったが、課外演習の結果が成績などに影響がないことを説明した。また、対象者には研究者の知り得ないID番号を付与し、質問紙に記入してもらいが、個人が特定できないことを説明した。

VII. 結果

1. 対象者の属性

1回目の課外演習の対象者は2名であり、2回目の対象者の2名と併せ、本研究の対象者は合計4名であり、全員が女性であった。

2. 看護実践能力に及ぼす変化について

1) 人間関係を形成する能力について

Kiss-18を用いて課外演習実施前後で学生に評定を

求めた結果を表1に示す。表には演習前後の6つの下位尺度毎の得点および18項目の合計得点を示した。

6つの下位尺度の得点で課外演習実施後に得点が低下した項目は、「攻撃に代わるスキル」以外の5項目であり、2名が2項目、1名は1項目で得点が低下した。前後で得点に変化がなかった学生は1名であった。実施後に得点が上昇した項目は、「ストレスを処理するスキル」以外の5項目であり、「初歩的スキル」と「高度なスキル」は2名の学生で得点が増加した。「初歩的スキル」「計画のスキル」は他のスキルに比較し得点が高い傾向を示し、「高度なスキル」「攻撃に代わるスキル」「ストレスを処理するスキル」では得点が低い傾向を示した。18項目の課外演習実施前後の合計得点の変化では、2名は変化なく、2名は上昇していた。

2) 臨床判断の基礎的能力について

課外演習実施後に自己評価を求めた結果を表2とした。表は各観点のレベル別人数を示す。LCJRは学習者の臨床判断の発達を評価するために活用されるものであるが、今回は1回の課外演習での臨床判断能力を学生が評価した結果となる。全員が「達成」と評価した項目は、予測されるパターンからの逸脱の認識、改善へのコミットメントであり、全員が「発展途上」と評価した項目は、データの意味づけであった。

3) 専門職業人として自ら学び続ける基礎的能力について

自ら学ぶ意欲測定尺度を用いて課外演習前後に学生に評定を求めた結果を表3に示す。表には、演習前後の3レベル7因子の得点と35項目の合計得点を示した。課外演習実施後に得点が低下した項目は、

表 1. 社会的スキルの演習前後での変化 (n=4)

学生	A		B		C		D	
	前	後	前	後	前	後	前	後
初歩的スキル	10	12	13	12	11	13	10	10
高度なスキル	10	9	8	9	9	12	9	9
感情処理のスキル	11	11	12	11	11	12	8	8
攻撃に代わるスキル	8	8	9	9	13	14	11	11
ストレスを処理するスキル	10	10	5*	9	11	10	8	8
計画のスキル	12	11	12	12	11	12	9	9
合計得点	61	61	59	62	66	73	55	55

※未記入項目あり参考値

表 2. 課外演習における臨床判断の自己評価 (n=4)

		初歩的	発展途上	達成	模範的	
気づきと解釈	効果的な気づきに含まれるもの	焦点を絞った観察	0	2	1	1
	効果的な解釈に含まれるもの	予測されるパターンからの逸脱の認識	0	0	4	0
		情報探索	0	2	2	0
反応と省察	効果的な反応に含まれるもの	データの優先順位付け	0	2	2	0
		データの意味づけ	0	4	0	0
	効果的な省察に含まれるもの	冷静で自信のある態度	0	2	2	0
		明確なコミュニケーション	0	2	2	0
		十分に計画された介入・柔軟性	1	欠損値	1	1
	技能的であること	0	2	2	0	
効果的な省察に含まれるもの	評価・自己分析	0	1	2	1	
改善へのコミットメント	0	0	4	0		

欲求レベルの「①有能さへの欲求 (1名)」「②知的好奇心 (1名)」、学習行動レベルの「③深い思考 (3名)」、学習行動レベルの「⑤積極的探求 (1名)」であった。

欲求レベルの2項目は比較的得点が高い傾向を示し、認知・行動レベルの「⑦有能感」は得点が低い傾向を示した。35項目の課外演習実施前後の合計得点の変化では、1名は低下し、3名は上昇していた。

3. 潜在看護師による SP を活用した課外演習での学生の経験と SP に対する認識

語りの内容から1) 潜在看護師 SP による経験や SP に対する認識について内容分析を行った結果を表4に示す。表には主要コードを記載した。以下、コードは「」、サブカテゴリは〈〉、カテゴリは【】で示す。

潜在看護師 SP に対し援助を行った経験や SP に対する認識を表す内容を抽出した結果、40 コードが抽出され、16 サブカテゴリ、5 カテゴリに分類された。

潜在看護師 SP に対する認識では、「潜在看護師が模擬患者さんと聞いていたので怖いというイメージ」と〈潜在看護師は怖い人〉という認識で演習に臨む学生がいた一方で、「…普通に学生の援助を受けてくれる大人の人…」と〈模擬患者は普通の人〉という認識や「(SPと聞いて) 何をやる人なのかわからない」と〈模擬患者は何をする人?〉と疑問を抱くなど、【未知の模擬患者に対する多様な認識】を持ち課外演習に参加していた。しかし、援助実施後には「実際に援助をしてみたら本当に患者さん」「あそこまでリアリティがあるとは思わなかった」と〈想像以上に本当の患者さん〉という【最初のイメージからの変化】を経験していた。

また、「動くとき苦しさを覚えるところやあまり沢山

動けないところが、患者さんのようでとてもリアル」と〈症状の再現性など実際の患者のような臨場感を経験〉し、「同じ状況設定でも、演じる人 (SP) や演じ方に違いがあり、もっと多くの模擬患者さんがいれば十人十色で様々な関わりから多くを学べる」と〈SP の個性や個人差から複数の患者を受け持つ疑似体験〉など【臨場感のある複数患者を受け持つ経験】をしていた。一方、「…模擬患者さんはこれから自分が何をされるのか分かっており、この援助はこの手順ですということを理解しているため、援助がスムーズに進んでしまう」「(実際の) 患者さんはどのように援助されるのか知らないため、実習で受け持った患者さんには、(腰を挙上するなど) 動く前に声をかけてから動いてもらったが、(SP は) 声をかける前に (先に) 浮かしてくれた」と〈実際の患者を逸脱した演技による非現実的な経験〉や、「実習で受け持つ患者さんは自分のことを評価しないため…」と〈患者から評価を受けるという新たな経験〉から、【実際の患者を逸脱した演技や患者から評価を受ける非現実的な経験】をしていた。また、SP による課外演習を通して、「学生同士だと元気なので普通に動いてしまうし、学生が想定できる範囲のことしかできない」「とても緊張感を持ちながら援助できる」など〈学生同士では味わえない感覚や緊張感を経験〉し、「もう少し素早くやらないと息苦しさが増してしまうとか…」と〈ケアの段取りや手際による対象への影響を実感する経験〉〈援助者としての自覚を再認識する経験〉をしていた。さらに、課外演習で初対面の SP への援助を通して〈短時間での援助の人間関係構築の難しさを痛感する経験〉など、【学生同士では味わえない経験を通してより良い援助を探究す

表 3. 自ら学ぶ意欲の演習前後での変化 (n=4)

学生		A		B		C		D	
レベル	因子	前	後	前	後	前	後	前	後
欲求 レベル	①有能さへの欲求	21	20	24	25	25	25	22	22
	②知的好奇心	22	18	20	22	19	19	24	25
学習行動 レベル	③深い思考	18	16	20	18	23	22	22	23
	④独立達成	13	13	21	22	15	18	12	13
	⑤積極的探求	15	18	23	21	17	19	18	18
認知・感情 レベル	⑥おもしろさと楽しさ	16	18	20	24	20	20	24	25
	⑦有能感	15	15	9	13	11	15	14	14
合計得点		120	118	137	145	130	138	136	140

表 4. 潜在看護師による SP を活用した課外演習での学生の経験と SP に対する認識

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
未知の模範患者に対する多様な認識	潜在看護師は怖い人	潜在看護師が模範患者さんと聞いていたの怖いというイメージ 学生じゃなくて一般の人が患者役をやってくれるというイメージ
	模範患者は普通の人	学生同士のフランクさではなく普通に学生の援助を受けてくれる大人の人というイメージ 地域の高齢のおじいちゃん、おばあちゃん、医療とか何とも知らない患者さんを演じる (SPと聞いて)何をやる人なのかわからない
最初のイメージからの変化	模範患者は何をする人?	演習の山梨さんのような感覚(学内演習時の事例を想起) 患者さんだとわかっているはずなのに(実際の患者に援助する感覚ではなく)、友達ではない気心の知れた先生のよ うな距離感で援助する感覚
	想像以上に本当の患者さん	実際に援助を試みたら本当に患者さん 呼吸が苦しそうとは思わなかったのでイメージが少し変化 あそこまでのリアリティがあるとは思わなかった もう少し(学生のする援助に)協力的なのかと思っていたが、想像以上に患者さん (教育的に配慮された患者をイメージしていたため)意外にも実際の患者のようでギャップが大きい (実際の患者のように)当たり前前にできていることができないう状況練習できる
臨場感のある複数患者を受け持つ経験	症状の再現性など実際の患者の ような臨場感を体験	学生同士だとわからない臨場感や臨床に近い状況 動く苦しさを感じるところやあまり沢山動けないところが、患者さんのようでもリアル 以前の練習で受け持った患者さんに雰囲気がとても似ている 同じ状況設定でも、演じる人(SP)や演じ方に違いがあり、もつと多くの模範患者さんがいれば十人十色で、様々な関 わりから多くを学べる
	SPの個性や個人差から複数 患者を受け持つ疑似体験	学生同士だとあまり差はないが、(実際の)患者さんは色々な体形の人があるのでマシエット巻くのも難しく、(寝衣 の)着替えも細い人だと腕を脱がせたり着せたり楽にできるが、男性など体格のいい人では寝衣を抜がせるのも難しい ので、模範患者さんも色々な人がいて、体格や性別による差を体験できる (SPの)個人差があり、状況は設定されていて(実際に疾患のある人ではなく健康な)人なので、設定と実際の測定 値の誤差があるなど、模範患者ならはだと思つた
実際の患者を逸脱した演技や患者から評価を受ける非現実的な経験	実際の患者を選脱した演技による非現実的な経験	実際の患者さんは(援助の方法や手順を知らないの)どのようなことをされるのかわかかっていないが、模範患者さんはこれから自分が何をされるのか分かっており、この援助はこの手順ですということを理解しているため、援助がスムーズに進んでしまう
	患者から評価を受けるという新たな経験	(実際の)患者さんほどのように援助されるのかわからないため、練習で受け持った患者さんには、(腰を挙上するなど)動く前に声をかけてから動いてもらつたが、(SPは)声をかける前に(先に)浮かしてくれた 実習で受け持つ患者さんは自分のことを評価しないため、(評価されるという)緊張はなかったが、模範患者さんは援助後に評価してくれるためテストのように感じる

<p>（看護や医療について）何も知らない人が患者役をしてくれると思っていたので、フィードバックをもらうことで一方的に学ぶというより相互的な学びができる</p> <p>（潜在看護師なので）看護の言葉を使うのは仕方ないし、（患者として感じたことというよりは）アドバイス視点で自分のいいところを探してくれる</p> <p>（実施した援助や自分自身のいいところと改善が必要など両方言ってくれる</p> <p>模擬患者さんから褒められたり、先生からもアドバイスをもらえたので大きな自信になる</p> <p>学生同士だと元気なので普通に動いてしまうし、学生が想定できる範囲のことしかできない</p> <p>実際に体温測定の間など、（その時間をつなぐために）患者さんどのように話したらいいのかがわかる</p> <p>とても緊張感を持ちながら援助できる</p>	<p>フィードバックにより、実施した援助や自分のいいところ、悪いところを知る機会や相互的な学びを提供してくれる経験</p>	<p>学生同士では味わえない感覚や緊張感を経験</p>	<p>前例のない（自分が経験したことのない）体験だから怖い</p> <p>もう少し素早くやらないと息苦しさが増してしまうとか、素早くやるけど安静を保ちながら援助する経験ができる</p> <p>手順の違いでちよつとした時間の差が生まれケアに支障がでたり、患者さんの体調につながるため、もつと時間を意識して援助しないといけない</p>	<p>学生同士では味わえない経験を通してより良い援助を探究する意義を自覚する経験</p>
<p>自分が援助者としてきちんとしないといけない</p> <p>（SP から）「これ何ですか。」「何測っているの。」「体温はこうしたら大丈夫ですか。」「など疑問に思っていることを聞かれたため、ただケアするだけでなく、患者の疑問にも答えられたいといけない</p> <p>全く初対面の人でどのような人かわからないので、何を話していいのかわからない</p> <p>そこで初めて会った人だから、その場で考えるのが一番難しい</p> <p>実際にあまりコミュニケーションをとれなかったから、そのような患者との関わり方を体験できる</p> <p>臨床では本当の患者さんなので、守らなくてはならないことは絶対守らないといけないし、失敗してはいけないが、模擬患者さんの場合、少し間違えても安全は確保されているので、自分の足りない部分がわかり次の援助につなげられる</p> <p>1 回目ですらうまくできなかったところを 2 回目で改善しようと考えながら援助できる</p> <p>看護師さんというくくりではなく、〇〇（学生名）さんとして見られている</p>	<p>援助者としての自覚を再認識する経験</p> <p>短時間での援助的人間関係構築の難しさを痛感する経験</p> <p>失敗が許される安全な環境下で試行錯誤を繰り返して探究する経験</p>	<p>ケアの段取りや手際による対象への影響を実感する経験</p>	<p>自分が援助者としてきちんとしないといけない</p> <p>（SP から）「これ何ですか。」「何測っているの。」「体温はこうしたら大丈夫ですか。」「など疑問に思っていることを聞かれたため、ただケアするだけでなく、患者の疑問にも答えられたいといけない</p> <p>全く初対面の人でどのような人かわからないので、何を話していいのかわからない</p> <p>そこで初めて会った人だから、その場で考えるのが一番難しい</p> <p>実際にあまりコミュニケーションをとれなかったから、そのような患者との関わり方を体験できる</p> <p>臨床では本当の患者さんなので、守らなくてはならないことは絶対守らないといけないし、失敗してはいけないが、模擬患者さんの場合、少し間違えても安全は確保されているので、自分の足りない部分がわかり次の援助につなげられる</p> <p>1 回目ですらうまくできなかったところを 2 回目で改善しようと考えながら援助できる</p> <p>看護師さんというくくりではなく、〇〇（学生名）さんとして見られている</p>	<p>学生として尊重される経験</p>

る意義を自覚する経験】へとつながっていた。

Ⅷ. 考察

1. 潜在看護師 SP による課外演習が学生の看護実践能力に及ぼす変化

本研究では、潜在看護師 SP による課外演習での経験が看護学生の看護実践能力に及ぼす変化について、人間関係を形成する能力、臨床判断の基礎的能力、専門職業人として自ら学び続ける基礎的能力の3つの側面から評価した。

人間関係を形成する能力では、Kiss-18 の下位尺度項目の初歩的スキル、計画のスキルは他のスキルに比較し得点が高い傾向を示し、高度なスキル、攻撃に代わるスキル、ストレスを処理するスキルでは得点が低い傾向を示した。また、18 項目の課外演習実施前の合計得点は、一般の大学生女子 58.35 点²⁰⁾に比較し3名の学生が高い傾向を示し、課外演習実施後には、成人女性 60.10 点²⁰⁾と比較しても3名の学生が高い傾向を示したことから、本研究対象者である看護学生も患者との援助の人間関係を構築し円滑な関わりを行ううえで必要な能力である社会的スキルが高い傾向があると推察され、先行研究を裏付ける結果と考えられる。これまで、一定期間続く臨地実習後に社会的スキルが上昇したことが示されており^{24) 25)}、社会的スキルはある程度の期間で各項目の示す状況に遭遇する中で育成されると考えられている。今回、SP を活用した1回の課外演習ではあったものの、対人関係を円滑にするため相手の気持ちを讀んだり気持ちを押し量り挨拶や話ができる「初歩的なスキル」、相手と協力して仕事を進めるために欠かせない「計画的スキル」の得点が比較的高い可能性が見い出されたことから、学内でも実習と同様の効果が期待でき、状況の設定によって効果的に社会的スキルを獲得できる可能性があると考えられる。

臨床判断の基礎的能力については、LCJR 日本語版を用いて、課外演習後に学生に自身の実施した援助について自己評価を求めた。全員が達成と評価した項目は、予測されるパターンからの逸脱の認識、改善へのコミットメントであり、全員が発展途上と評価した項目は、データの意味づけであった。「予測されるパターンからの逸脱の認識」の達成レベルの評価内容は、「データにおける顕著なパターンからの逸脱を認識し、これらを継続的にアセスメントするために活用する」であり、SP への援助を通して、症状のある患者や援助によって症状が変化する状況

を経験する中で、その状況を捉えアセスメントしながら実践する必要性を再認識した結果と考えられる。また、「改善へのコミットメント」の評価内容は、「看護のパフォーマンスを改善させたいという意欲を示す。経験を振り返り評価する。」であり、SP からのフィードバックを受け自分の実施した援助を客観的に振り返ることで、よりよい看護実践につなげる意欲につながったためと考えられる。

専門職業人として自ら学び続ける基礎的能力について、課外演習後に自ら学ぶ意欲測定尺度で得点が低下した項目のうち、学生数が多かった項目は、学習行動レベルの「③深い思考」であった。インタビューの中で、「自分が援助者としてきちんとしないといけない」「(SP から) 疑問に思っていることを聞かれたため、ただケアするだけではなく、患者の疑問にも答えられないといけない」と語っており、〈援助者としての自覚を再認識する経験〉により、知識を再吟味し実際の援助場面で再検討する必要性に気づく機会となり、自身の課題として過小評価した可能性が考えられる。

今回は1回の課外演習での前後比較であり、対象者数も少なく、授業時間外に参加しようという比較的意欲の高い学生が参加したと考えられることから、今後は長期的な変化や学生数を増やしてデータを蓄積していく必要がある。

2. 潜在看護師による SP の特性

SP を活用した課外演習により、学生は【臨場感のある複数患者を受け持つ経験】や【学生同士では味わえない経験を通してより良い援助を探究する意義を自覚する経験】をすることができ、学内演習においても臨地実習に近い臨床状況を再現し効果的な学習につながるということが再確認できた。

今回、潜在看護師を SP として活用したが、〈潜在看護師は怖い人〉と感じる学生もいたが、ほとんどが〈模擬患者は普通の人〉というイメージを持って演習に臨んでいたことから、潜在看護師だからという過度な緊張感はなかったものと推察される。SP への援助実施後も〈想像以上に普通の患者さん〉と【最初のイメージからの変化】しており、潜在看護師という認識よりは、症状の再現性などから“患者さん”として認識できていたことは潜在看護師の活用可能性を支持する結果と言える。

一方で、〈実際の患者を逸脱した演技による非現実的な経験〉〈患者から評価を受けるという新たな経験〉

から、患者の症状や反応に加え、看護援助を理解できる潜在看護師だからこそ、本来の患者を逸脱した反応を無意識に演じてしまうという特性があると考えられる。特に、SPは患者として看護師役の学生の態度や言動によって、どのように感じたのか、感情の変化がもたらされたのかを、その時の「状況・場面 (S:Situation)」、看護師 (学生) の「態度・言動 (B:Behavior)」「気持ちの変化 (O:Output)」という要素を踏まえてフィードバックする役割がある²⁶⁾。しかし、学生は〈患者から評価を受けるという新たな経験〉として捉えていた。これらは、村岡ら¹⁷⁾の医療職がSPをするうえで陥りやすい問題と同様の結果であり、潜在看護師をSPとして養成する際に強化すべき課題であると考えられる。これらの課題を解決することにより、潜在看護師SPの症状や援助における実際の患者の反応を理解できるという強みを最大限に引き出し、効果的な教育活用の実現につながる可能性があると考えられる。

IX. 研究の課題と限界

本研究の対象者は4名と少なく、性別も女性のみであり偏りがある。また、授業時間外での課外演習に参加したいという比較的学習意欲の高い集団であると考えられることや、個々の対象者の固有特性が大きく反映されている可能性が考えられることから、看護系大学の学生の看護実践能力や経験を示すには限界がある。今後、さらに対象者数を増やし検討していく必要がある。また、本研究対象である2年生はCOVID-19感染拡大の影響により、学生同士の接触や感染リスクを伴う技術演習や臨地実習においても実習時間の短縮などの制約もあり、本研究のメインアウトカムである看護実践能力の獲得が難しい状況であったことが推測される。看護系大学生の看護実践能力を評価するうえで、各専門領域での講義や演習、専門領域実習を経験した3、4年生などを対象とした評価についても今後、検討していく必要がある。

X. 結論

潜在看護師SPによる課外演習での経験が看護学生の看護実践能力に及ぼす変化について、3つの側面から評価した結果、以下の内容が明らかとなった。

人間関係を形成する能力は、Kiss-18にて評価し、初歩的スキル、計画のスキルは他のスキルに比較し得点が高い傾向を示し、18項目の合計平均得点は、

課外演習後は62.8 (± 7.5) 点で、一般の大学生女子や成人女性と比較して高かった。

臨床判断の基礎的能力はLCJR日本語版にて評価し、予測されるパターンからの逸脱の認識、改善へのコミットメントでは、全員が達成と評価し、データの意味づけでは、全員が発展途上と評価していた。

専門職業人として自ら学び続ける基礎的能力は、自ら学ぶ意欲測定尺度で評価し、欲求レベルの①有能さへの欲求、②知的好奇心で得点が高い傾向を示し、認知・行動レベルの⑦有能感では得点が高い傾向を示した。

潜在看護師SPを活用した課外演習での経験では、潜在看護師SPに対し【最初のイメージからの変化】を感じていた。また、【臨場感のある複数患者を受け持つ経験】【実際の患者を逸脱した演技や患者から評価を受ける非現実的な経験】【学生同士では味わえない経験を通してより良い援助を探究する意義を自覚する経験】から、学内演習でも臨地実習に近い臨床状況を再現し効果的な学習につながる事が再確認できた。また、〈実際の患者を逸脱した演技による非現実的な経験〉〈患者から評価を受けるという新たな経験〉から、患者の症状や反応に加え、看護援助を理解できる潜在看護師だからこそ、本来の患者を逸脱した反応を無意識に演じてしまうという特性があることが示唆された。

本研究は、研究者の所属組織の研究助成金 (2021年度共同研究費) を得て実施した。本研究における利益相反 (COI) はない。

【文献】

- 1) 厚生労働省 (2019) 看護基礎教育検討会報告書, <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (2021.10.18 最終アクセス)
- 2) 本田多美枝, 村上朋子 (2009) 看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察: 教育の特徴および効果, 課題に着目して, 日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report, 7, 66-77.
- 3) 和住淑子, 山本利江, 齊藤しのぶ (1999) 模擬患者への看護を初めて体験した初年次看護学生の体験内容と認識の特徴, 千葉看護学会会誌, 5 (2), 49-54.
- 4) 文部科学省 (2021) 新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方

- に関する有識者会議報告書 看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について ,https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf (2021.10.19 最終アクセス)
- 5) 文部科学省 (2002) 看護学教育の在り方に関する検討会報告書 ,
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm (2021.10.19 最終アクセス)
- 6) 厚生労働省 (2011) 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書 ,
<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf> (2021.10.18 最終アクセス)
- 7) 植村研一(1988) Simulated Patient, 医学教育 ,19 (3) ,218-221.
- 8) 藤崎和彦 (1993) 模擬患者を使った面接技法 日本での試み アメリカの医学教育における模擬患者の導入の現状とその理論, 看護展望 ,18 (8) ,44-48.
- 9) 松本智美, 幸史子, 井口悦子他 (2020) 模擬患者参加型演習が高齢者や看護大学生に及ぼす効果, 活水論文集 , 6, 24-30.
- 10) 渡邊聡美, 山崎歩, 中村もとゑ他 (2016) 看護基礎教育における模擬患者参加型教育の教育効果と課題—教員の視点から—, 日本赤十字広島看護大学 ,16, 21-28.
- 11) 原島利恵, 渡辺美奈子, 石鍋恵子 (2012) 看護における模擬患者を活用したシミュレーション教育に関する文献検討, 茨城キリスト教大学看護学部紀要 ,4 (1) ,47-56.
- 12) 中村ともゑ, 山崎歩, 渡邊聡美他 (2016) 看護系大学における模擬患者の養成および活用の現状と課題, 日本赤十字広島看護大学 ,16, 29-38.
- 13) 鈴木富雄, 阿部恵子 (2011) よくわかる医療面接と模擬患者, 名古屋大学出版会, 愛知県.
- 14) 日本看護科学学会看護学術用語検討委員会 (1995) 看護学術用語 ,
https://www.jans.or.jp/uploads/files/committee/1995_yougo.pdf (2021.10.18 最終アクセス)
- 15) 山本直美, 伊藤朗子, 富澤理恵他 (2015) 看護技術教育のための模擬患者 (Simulated Patient:SP) 養成の実際, 千里金蘭大学紀要 ,12, 151-160.
- 16) 大学和子, 西久保秀子, 土蔵愛子 (2005) 基礎看護学における客観的臨床能力試験 (OSCE) の実践—ボランティアによる模擬患者と現任看護師による標準模擬患者との評価から—, 聖母大学紀要 ,2, 27-34.
- 17) 村岡千種, 藤崎和彦 (2010) 医療職が模擬患者を演じるということ—SPになるまでのプロセスと功罪—, 日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会誌 ,8 (1) ,21-30.
- 18) 厚生労働省 (2014) 第1回看護職員需給見通しに関する検討会資料 3-1 看護職員の現状と推移 ,
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000072895.pdf> (2023.7.10 最終アクセス)
- 19) 野呂瀬崇彦, 村上美穂 (2019) 日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会誌 ,17 (1) ,10-21.
- 20) 菊池章夫 (1998) 思いやりを科学する, 川島書店, 東京.
- 21) 細田泰子, 根岸まゆみ, キャシー・ラサター (2018) 臨床判断を拓く評価に向けて ラサター臨床判断ルーブリック日本語版の作成, 看護教育 ,59 (1) ,40-47.
- 22) Tanner, C.A. (2006) Thinking Like a Nurse: A Research-Based Model of Clinical Judgment in Nursing, Journal of Nursing Education, 45 (6) ,204-211.
- 23) 櫻井茂男, 大内晶子, 及川千都子 (2009) 自ら学ぶ意欲の測定とプロセスモデルの検討, 筑波大学心理学研究 ,38, 61-71.
- 24) 石光美美子, 古谷剛, 林美奈子 (2012) 看護大学生の半年間にわたる臨地実習前後の社会的スキルの変化, 目白大学健康科学研究 ,5, 61-66.
- 25) 下村美佳子, 和田恵, 時長美希 (2015) 看護学生の臨地実習前後の社会的スキルの変化と実習中における人とのかかわり, 高知女子大学看護学会誌 ,41 (1) ,163-169.
- 26) 日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会 (2009) 薬学生・薬剤師育成のための 模擬患者 (SP) 研修の方法と実践, じほう, 東京.

Changes in practical nursing skills of nursing students owing to their experience of extracurricular practice using potential nurses as simulated patients

SOHDE Harumi, SHINDOU Yuji, YAMAMOTO Nao, HAGA Ryo,
HONMA Takayuki

key words: potential nurses, simulated patients, nursing students, practical nursing skills